

平成30年度

福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん



弥富市社会福祉協議会

ごあいさつ

このたび、弥富市社会福祉協議会として三回目の実施となる福祉体験作文コンクールに、市内各校より多数の福祉体験作文をお寄せいただき、誠にありがとうございます。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきますので、ご覧いただけると幸いです。

さて、今年は「平成」最後の一年となりました。来年の春には新しい元号となります。この一時代を振り返ってみると、社会構造が大きく変化したように思います。便利なものがまちに増え、人々の生活を快適にしている一方、そういったものを不便に感じる人もいます。では、不便に感じている人はどうしたら快適に生活できるでしょうか。みんなが快適に生活するにはどうしていけば良いでしょうか。その「どうしたら良いの?」という疑問が、『福祉』の入り口とも言えるでしょう。

テーマは福祉体験です。

いろいろな価値観や考え方があり、人によって考え方が違うことは当たり前です。自分とは違う考え方の人を排除しよう。それでは社会は成り立ちません。みんなが幸せに過ごすことのできる社会にするために、

自分には何ができるのか。児童・生徒のみなさん一人ひとりが、試行錯誤して行動に移したことや思いやりの気持ちがある今回の作文に表れているように感じます。

少子高齢化はますます進み、手助けを必要とする人も増えていきます。人工知能等のテクノロジーの進化では担えないことはまだまだあります。困っている人がいても、別の誰かがやるから良いではなく、その別の誰かが自分なのだと行動に移すことができれば、みんなが幸せに過ごせる社会に近づくのではないのでしょうか。勇氣ある行動が、いつか自信につながっていきます。今はまだできることが少ないと思うかもしれませんが。しかし、自分にとっては小さなことでも、相手にとっては大きなことかもしれません。

本会といたしましても、「地域共生社会」の実現に向けてボランティア体験等の経験の場を増やして、児童・生徒の気付きや思いやりの心を育ててまいりたいと思います。

平成三十年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 八木輝美

平成三十年度「福祉体験作文コンクール」作文集

・ 最優秀賞	私にできること	弥富中学校 二年	鈴木 桃花
・ 優秀賞	ぼくの大切なおばあちゃん	十四山東部小学校 六年	渡邊 優翔
・ 秀逸	「気づく」の一步	弥富北中学校 一年	野間 結惺
・ 秀逸	同じ人間、同じ心	桜小 学校 六年	矢神 葵
・ 入選	人とのつながりの大切さ	十四山 中学校 二年	水谷 海莉
・ 入選	あたりまえの日常	弥富北 中学校 一年	山岸 楓
・ 入選	いもんに行つて	白鳥小 学校 六年	百合草 梨葵
・ 入選	目が不自由な人の生活をしてみて	桜小 学校 四年	太田 有哉
・ 佳作	ゴミから学べること	十四山 中学校 二年	早川 稀々
・ 佳作	勉強になった福祉体験	白鳥小 学校 五年	稲垣 呼音
・ 佳作	福祉体験をやつて思ったこと	十四山東部小学校 五年	土方 茉結
・ 佳作	ひいおじいちゃんとひいおばあちゃん	日の出小学校 四年	長瀬 優杏

☆最優秀賞☆

私にできること

弥富中学校 二年 鈴木 桃花

以前テレビで、高校生の人達が地下鉄で心臓発作を起こして倒れた人を助けたというニュースを見ました。AEDを使って電気ショックをした後、心臓が動き出し、呼吸も戻ったそうです。助けた高校生の人達は、中学生のときにAEDの使い方をボランティアサークルで学んだとのことでした。同じくらいの年齢の人達による人助けのニュースに、私は大きな衝撃を受けました。

このニュースを知ってから数か月後、弥富市の広報で、海部南部消防組合が開催している救命活動の講習会があるということを知りました。私は、この講習に参加したいということを母に伝えました。申し込む際に、中学一年生でも参加できるかを聞くと、消防組合の方から、

「心配しないで来てね。興味をもってくれたことがうれしいよ。がんばろうね。」

と声をかけてもらい、安心して参加することができました。

当日は、叔母と二人で講習会に参加しました。参加者は十名程度でした。講習は三時間で、日々の救命活

動の実体験を聞くことから始まりました。たった一人の力では、できることも助けることも限られるけれど、協力することによって助かる確率が上がることを知りました。例えば、外でAEDを使用する場合、肌が見えてしまうという心配には、人を多く呼び、人のカーテンを作って覆うことでその人が見えないように守ることができるということを知りました。また、大人でないからできることがないというわけではなくて、大きな声で助ける仲間を集めることや、AEDを走って持ってくることで、救急車を呼ぶことなど、緊急時に、自分にできることはたくさんあるということを知りました。

講習では、緊急時を想定して、実際に人を呼ぶところからのシミュレーションをしました。いよいよ私の番です。なかなか大きな声が出せません。何度もやり直すうちに、少しずつ声が大きく出せるようになってきました。周りの大人の人達から、

「しっかり声を出せていたよ。」

と声をかけてもらうことができました。私の声が小さいときには、ペアの人には聞こえずに次の行動を取ってくれませんでした。このシミュレーションでは、声を出し合うこと、声を掛け合うことの大切さを学びました。

「死戦期呼吸」という言葉がどんな様子なのか講習に参加するまで知りませんでした。私が講習に参加した

五日後、高校の野球部のマネージャーが倒れ、亡くなったニュースを見ました。呼吸があつたので、AEDは使わずに救急車の到着を待っていたそうです。しかし、その呼吸は心停止状態になつても呼吸しているように見えるという「死戦期呼吸」の可能性があつたそうです。きつと誰か知っている人がいたら、AEDを使つたでしょう。救命についての知識をもっておくことの大切さを改めて実感しました。

シミュレーションの中で、胸骨圧迫も体験しました。胸骨圧迫はとても力のいる作業で、中学生の女子の力では、目標の強さ、速さではできませんでした。大人の人でも、体力的に厳しいので、何人も交代して行うことの大切さを学びました。だからこそ、協力してくれる人を集めることが必要なのだということも知りました。また、自分の身近な人が心筋梗塞や脳卒中になつたときにも、胸骨圧迫をしたほうがいいのかを質問しました。すると、体に血液を送ることはいいことなので、したほうがいいということを教えてもらいました。

三時間の講習の後、修了証をもらいました。日々の生活の中で、「困っている人がいたら声をかけること」「できる手助けをすること」は、当たり前前のことです。一人一人の優しい気持ちの輪がつながることが、福祉の入り口だと思いました。今回の講習を受けて、自分のような子どもであってもできることはたくさんある

ことを知りました。一度の参加ではなく、定期的に参加して、いざというときに行動できる人になりたいです。

私たちは、十八歳で成人になる初めての世代です。あと四年でもう大人です。自分にできることをしっかりと増やしていき、みんなが助け合い、安心して生活していける街づくりに参加していきたいと思います。その第一歩として、自分のやってみようという気持ちを大切にして、これから福祉について考えていきます。



☆優秀賞

ぼくの大切なおばあちゃん

十四山東部小学校 六年 渡邊 優翔

ぼくのおばあちゃんは、認知症で、グループホームという施設に入っています。

十ヶ月前までは、一人でがんばって生活していたけど、腎臓の病気、全身の関節が痛くなる病気が重なり、高熱で一人で倒れている所をぼくのお母さんが発見し、救急車で運ばれ入院したことがきっかけで、認知症になったそうです。

ぼくは、「認知症」という言葉は、テレビなどで何度も聞いたことがあったけど、曜日が覚えられなくなったりするぐらいで、そこまで大変な病気じゃないと思っただし、リハビリみたいなのをすれば簡単に治る病気だと思っていました。でも実際、ぼくのおばあちゃんが認知症になり、日に日に会話もできなくなり、ご飯も食べなくなつてやせてしまい、笑顔もほとんどなくなつていく姿をみて、今までできていたことがほとんどできなくなる、大変な病気だということが分かりました。

以前おばあちゃんが元気で一人で暮らしていたときは、足を二回、手を一回骨折して、体は不自由だったけど、おばあちゃんの家に遊びに行ったときに、ぼく

のために一生けん命作ってくれたポテトサラダが大好きでした。それが食べられなくなったのも残念だし、お正月も毎年泊まりに来てくれて楽しんでいたけど、これからは、来られなくなったのでとてもさみしいです。でも、急に体が動かなくなったおばあちゃんはずっと悲しい思いをしていると思います。けれど、ぼくが会いにいくと、言葉はないけど、いつも笑顔で、とてもうれしそうな顔をしてくれます。ぼくはそれがとてもうれしいです。

ぼくがおばあちゃんのためにできることは、いっぱい会いに行つて笑顔を増やしてあげること、何か困つてそうな時に、優しく、ていねいに接して助けてあげることだと思います。

ニュースなどでも、これからはお年よりが増えていくということを耳にします。おばあちゃんのように、認知症の人が増えていくと聞いています。ぼくがおばあちゃんを通して感じたことを、他のお年よりにも、少しでも力になればいいなと思いました。



◎秀逸

「気づく」の一步

弥富北中学校 一年 野間 結惺

僕は小学生のときの総合的な学習の時間で、障がいのある方に多くの事を教えていただいたり、実際に車いすや手話、点字などを体験したりしました。そして僕は、その体験の中で、今でもはっきりと覚えていることがあります。それは、

「どの人、どんな障がい関係なく、全ての人がネガティブな考えをもっていない」という事です。小学生だった僕には、その事の大切さがあまり分かりませんでした。ですが、今考えてみると、それはとても大切な事だと思っています。なぜなら、どんな事でも、ネガティブでいると得することはありません。しかし、ポジティブでいることによって、損することは減るし、得することは、かなり増えると思います。なので、僕も、どんな事でもポジティブに考えることができるようにしていきたいと思いました。

また、僕は他にも多くの福祉に関する体験をしたことがあります。その中の一つは、幼稚園の時と小学校六年生の時に老人ホームを訪問したことです。幼稚園のときには、老人ホームにいた人たちに歌やダンスをひろうしたりしました。この時、聞いていた人たちは、

ものすごくうれしそうで、楽しそうで、歌っているこっちの方まで、とてもうれしくなったのを覚えています。小学校六年生のときには、習っていた地域の神楽太鼓をひろうしに行つて、その後、一緒に昼食を取りました。その日、太鼓を演奏していると、一人のおばあちゃんが突然、号泣してしまいました。後で、

「どうしたんですか？」

と尋ねに行つたら、その人は、

「もう、うれしくて、うれしくて……」

と答えてくれました。僕は、

「自分の演奏する太鼓をこんなにも喜んでくれる人がいるなんて。」

と、さらに嬉しくなりました。

そして、僕の心に一番残っているのは、小学生の時に「福祉の講演会」に参加したことでした。それは、実際に障がいをもっている人の話を聞いた後、福祉に関するDVDを見るという内容のものでした。その中でも特に印象に残ったのは、障がいをもった人のお話です。そのお話の中で、僕は、

「気づく、が第一歩。」

という言葉がとても心に響きました。なぜなら、僕もそうだと思うからです。まず気づくことができないと何も変わらないし、何の行動にも移せません。僕は次の次に、考えることが大切だと思います。これは、助けが必要か、他の人と協力しなければいけないのか、

ということを考えるということです。その次が協力する。最後に、行動する。という順番になっていると思います。僕はこのことをきちんと言うことのできる人が、今の世界には多く必要だと思います。

最後に、ここまで多くの事を述べてきましたが、結局一番大切に忘れてはいけないことは「人の優しさ」だと思います。それを失ってしまうと、人は機械と同じようなものになってしまいます。優しさを忘れずに、人間らしく生きる。これは、生きる上での絶対条件だと思います。そして、よく考えると今まで述べてきたことは、全てこの「人の優しさ」という一つの大きなものに繋がっているように感じます。例えば「気づく」という行動でも、常に周りに優しく、周囲を見ることのできている人のみが、できることだと思います。他にも、周りの人を喜ばせたり、うれしい気持ちにさせることも、おもいやりをもって人と接することができていないといけないと思います。そして、「今の世界にはそのような人を求めている国や地域がとてまたたくさんある」と思います。その求めている多くの人たちのために、「福祉」というものがあるのだと思います。なので、そのようなとても多くの人たちのためにも、僕はためになるお話をたくさん聞いたり、体験したりして、福祉や障がいをもって人たちに ついての理解を深め、そのような人たちの助けになることができると思います。またそのような

貴重な体験が多くできることに感謝し、一日一日を大切に過ごしていくと共に、人の優しさを忘れずに、多くの人の助けになることができるようになりたいと思います。

◎秀逸

同じ人間、同じ心

桜小学校 六年 矢神 葵

私の兄は、自閉症です。なので、こだわりというものがあります。例えばコマースシャルが嫌いです。コマースシャルを聞くと、パニックをおこしてしまったり、テレビをすぐ消してしまいます。家族がおもしろいテレビを見ていて、テレビを消されてしまったことがありました。私は正直、めんどくさいと思いました。せっかくおもしろかったのに、なんで消すの？とおこっています。知っているけれど、そんな言葉を発してしまった、と今思うといけなかったなあと胸が苦しくなりました。



けれど、兄は助けられます。算数が分からなくてこまっていたら、どうしたの？と一番に声をかけてくれます。また、兄の好きなテレビと一緒に見ると、兄はゲラゲラ笑っています。そんな兄を見ると家族全員笑ってしまいます。

兄が、ハンディキャップのある大人や子どもが参加するメンバーに入っているの、私もついていくことがあります。その活動の一つのクリスマス会で私は、トナカイ役で、参加している人たちに、プレゼントをわたしました。その時、私は自然と笑顔になっていました。

その活動に参加しているお姉さんがいます。お姉さんは私に会うと、「あおいちゃん」と笑顔でハグをしてくれます。そのお姉さんはしつかり者で、何でも笑顔に変えてくれます。お姉さんを見ると、胸があたたかくなりました。そのお姉さんは、ダウン症をもっています。でも、いつも周りの人を笑顔にすることができます。私はそんなお姉さんが大好きです。

どんな障害をもっている人、その人を受け入れ、その人によりそば、必ず心を開いてくれることが、体で実感することができました。障害をもっている人はこわいというのはおかしいです。私の力は小さいですが、でも、同じ人間だから区別されなければいけない人などこの世の中にいないという考えを少しでも広げていきたいです。

○入 選

人とのつながりの大切さ

十四山中学校 二年 水谷 海莉

道でお年寄りが困っていたら声をかけることができるかと言われたら、僕にはできないと思います。日本は今、高齢化社会であると言われています。そう考えると、自分の住む町内でも、半分以上の世帯はお年寄りだけの世帯です。朝、学校に登校するときでも多く見かけるのは、お年寄りが畑仕事や散歩をしている姿です。最近、学校の授業や、テレビなどで日本が世界の中でも高齢化がとて進んでいるということも知りました。そこで、自分も関心を持ち、将来、人との関わり方の幅を広げる良い機会になると思います、夏休みに母親が働いている介護施設に行くことにしました。

体験当日、働いている職員さんに迷惑をかけないか、利用者さんに不快な思いをさせないかすごく緊張しました。自分が笑顔でしつかりあいさつをし、コミュニケーションをとることができると、不安でいっぱいだったからです。

不安な気持ちを抱えたまま施設に着き、普段から学校の先生に「第一印象は笑顔とあいさつで決まる」と言われていたので、精一杯元気な声で「おはようございます」とあいさつをしました。自己紹介のときに、緊張している僕をみて、利用者さんが「大丈夫だよ」

と声を掛けてくれたので安心して、緊張が少しほぐれました。そして自己紹介をするとみんなが拍手で迎えてくれました。普段の生活で、誰かに拍手をしたり、相手をほめたり、ほめられたりすることはあまりなかったのを改めて自分がしてもらったことに、とても心が温かくなりました。

まず、利用者さんと体操をしました。体操といっても元気に体を動かすというより、顔や手など、上半身を中心にストレッチするものでした。あまり楽しそうじゃないな、と心の中で思っていたのですが、道具の準備をしたり、一緒にやっていると、利用者さんがすごく笑顔でやっていたので、それにつられて、僕も楽しくなってきました。

次にお昼ご飯を食べる手伝いをしました。自分の担当は、利用者さんが飲むお茶を机まで運ぶという作業でした。僕は、言われた通り、お茶を机まで運んできました。すると「ありがとう」と言ってくれました。お茶をこぼしてしまったときには利用者さんが「気にしないでいいよ」と言ってくれたので、失敗してしまったことを引きずらず切り替えることができました。このことから人に感謝されることやフォローしてもらうことは、とても気持ちが良いことなのだと気づきました。

この体験の中で印象に残っているのは、折り紙の作業をお手伝いしているときです。うまく折り紙が折れ

ない利用者さんに誰も声をかけず、頑張っている姿を見たときです。なぜ、みんなは手助けをしないのか。職員さんに聞いてみました。すると、

「私達は、利用者さん達を介護するだけでなく、利用者さん達が介護を必要としなくなるようにお手伝いをするのも私達の仕事なんだよ。」

と言われました。これまで、介護士と聞いたら、介護施設で生活のお世話をするだけだと思っていました。でも、介護を必要としなくなるまで責任を持って手助けすることも仕事、ということにとっても驚きました。その利用者さんは、少しの手助けで最後まで折り切ることができました。利用者さんに合わせた介護をするということとは大切だということを知りました。

最後に職員さんに「この仕事のやりがいは何ですか。」と聞きました。すると、利用者さんが笑顔で「ありがとう。」と感謝してくれることだと言っていました。「手伝う」といっても簡単な仕事ではなく肉体的にも大変な仕事だと思いました。たった一日でしたが、僕が感じた感謝の気持ちや、うれしい気持ちがやりがいにつながることを学びました。そして高齢社会になりますますお年寄りが増えてくる日本でこれから生きていく僕たちがお年寄りに寄り添って生きていくことの大変さと大切さ。将来、人を笑顔にできる仕事をしていきたいと改めて感じることができました。

○入 選

あたりまえの日常

弥富北中学校 一年 山岸 楓

私の祖父は障がい者です。元気だった祖父はある日突然、障がい者になってしまいました。それは忘れもしない小学生のときの出来事です。学校から帰ると祖父は家にいませんでした。救急車で病院に運ばれたのです。

その日、家の中は、とても慌ただしかったです。祖母は、自転車に乗ってすぐに病院に向かいました。父は仕事だったので急いで職場から病院に向かいました。そして、帰宅した祖母から、祖父の様子を聞きました。祖父は、救急車で運ばれるとき、顔色が悪くなつて冷や汗をかき、胸が締め付けられるように苦しく、歩くのがやっとだったそうです。それでも動けたので自力で救急車に乗り込みました。そして、病院に着いた祖父は、狭心症と診断されました。そのまま病院で手術を受けて入院しました。祖父は、今でも定期的に通っています。

入院した祖父は、一時的に体が不自由になったので、病院の看護師さん達に助けられました。祖母や父がいるときはいいのですが、体が動かないので何から何までやってもらわないといけません。家族でも、親戚でも知り合いでもないのに、看護師さん達はいやな

顔もせず、親切にしてくれました。祖父も命を救ってくれた病院の先生や看護師さん達には、とても感謝をしていました。そんな看護師さん達の姿を見て私も将来は、病院で働く医療関係の仕事をしたと思うようになりました。

退院した直後の祖父は、いつもの生活ができませんでした。当たり前のようにやっていたことができなくなってしまうのです。体が不自由だったので、ご飯を食べることもままならず、トイレに行くこともきつい状態でした。特にお風呂へ入るときは、すぐ大変でした。祖父の家のお風呂はバリアフリーになっていません。腰かけもなければ、手すり也没有せん。それに、祖父が病院から退院したのは、寒い風の季節だったので、服を脱ぐ脱衣場には、石油ヒーターを持ってきたので、服を脱ぐ脱衣場には、温度差があると、ヒートショックといって血圧の変化が急激に起こり、突然死の原因になってしまいます。そのため、祖父がお風呂に入るときは、必ず脱衣場を温かくしていただきました。さらに、もしものことを考えて祖母が父が付きそつていました。幸い祖父は、このときの体が不自由だった症状は少しずつ回復していき、身の回りのことは全て自分自身でできるようになりました。

祖父が入院して、バリアフリーの大切さを改めて感じました。祖父が入院した病院は廊下も広く、手すりもあってバリアフリーになっていました。しかし、今

の祖父が住んでいる家は、バリアフリーになっていません。昔の家を改築した家なので、段差も多く当然移動のための手すりもありません。祖父が寝ているベッドからトイレに行くこともひと苦労です。今まで自分でできていたことができなくなるのです。日常生活で気にならなかった当たり前のことが、障がい者になって体が不自由になると大きな障がいになってしまうのです。

家がバリアフリーになると、介護をする家族の負担も少なからず減ると思います。誰でも介護で家族に迷惑をかけたくないと思うはずです。もし、家中に段差がなければ寝室からトイレまでの移動が、ずいぶん楽になるはずです。もし、お風呂の中に腰かけや手すりがあれば、お風呂に入ることが、ずいぶん楽になります。

今回、私が祖父の入院で、自分に関係のなかったことや関係のない世界のことに対してあまりにも無関心であったと感じました。きっとバリアフリーについては、祖父の体が不自由になっていなければ、何も気づいていなかったと思います。祖父の不自由な姿を目の当たりにして初めて気づいたのです。中学生の私もいずれば、年をとり、おばあさんになっていきます。毎日学校へ通い、部活動でハンドボールをしている私も年をとれば足腰が不自由になってしまふときが来るかもしれない。そんなとき、障がい者に優しいバリア

フリーの家はとても大切であると感じました。まだ、これからの日本は、さらに高齢化社会が進みます。自宅だけでなく、街全体をバリアフリーにして、誰もが住みやすい街づくりが、大切であると思いました。

○入 選

いもんに行って

白鳥小学校 六年 百花草 梨葵

私は、去年の八月四日から、弟といとこの小学生四人と九十才のひいおじいちゃんと祖父と祖母とおばさんと老人ホームへ行って、いもんをしています。祖母にいもんをさそわれて、初めて聞く言葉で、「いもんってどんなんだろう」とドキドキする気持ちでいっぱいでした。

行ったら、おじいちゃんやおばあちゃんが、手をさしのべて、笑ってむかえてくれました。私は、おじいちゃんやおばあちゃんたちと、手遊びをしたり、季節ごとに歌をかえていっしょに歌っています。私が一番好きなのは「しあわせなら手をたたこう」の歌です。なぜかと言うと、私たちが、おじいちゃんやおばあちゃんたちのところへまわり、手をいっしょにたたいた

り、かたをポンポンとたたいたりして、ふれあうからです。手遊びの歌の中に「つぼさん」のわらべ歌があります。おじいちゃんやおばあちゃんたちが、つぼを手でつくってくれて、歌にあわせて、その中に私たちの指を入れてまわります。歌の最後に、つぼの中に、私たちの指が入っていた人が、あたり！となり、手作りの景品をわたします。景品は、くす玉をたくさん作ってもっていきます。もらってくれたおじいちゃんやおばあちゃんたちが、よろこんでくださるので作ってよかったなと思いました。いもんに行くまでに、おじいちゃんやおばあちゃんたちが分かりやすいように、B紙に大きく歌詞を書いたり、季節に合わせたこいのぼりや、かぶなどを作ったりして、もっていています。今年の四月から五年生のいこと、学校でならった曲を、二人で、リコーダーでえんそうをしています。おじいちゃんやおばあちゃんたちが、「うまいね」といつてくれ、うれしいな、やってよかったなと思いました。

いもんをやつてうれしかったことは、二つあります。一つ目は、初めて会った、たくさんの人たちとのこうりゆうができたこと。二つ目は、おじいちゃんやおばあちゃんたちが、歌ったり、まねをしたりして、笑顔になってくれたことです。

祖父や祖母のおかげで、いもんというすばらしい経験をする事ができともうれしかったです。今年の

二月に天国に行った九十才のひいおじいちゃんとも、何度かいもんに一緒に行きました。それも私の宝物です。これまでに、行きたいもんの回数も十四回になりました。先日、行つたいもん先の方から、「顔をくずして感動の涙を流していた方や帰る帰ると言っていた方のニコニコ笑顔を見ることができた」と、うれしいお言葉を頂きました。これからも、いっぱい歌を覚えて、もつと、さまざまな人とかかわりをもっていけたらいいなと思います。

○人選

目が不自由な人の生活をしてみて

桜小学校 四年 太田 有哉

ぼくは、目が不自由な人がどんな生活をしているか体験してみました。

いつも生活をしている家の中を目かくしをして歩いてみました。

部屋からげんかんの外まで歩いてみました。かべに手をついて歩こうとしたけど、かべがどこにあるかわかりませんでした。兄に少しあんないしてもらうと、かんたんにかべに手をつけることができました。その

後、外に出るためにげんかんまで行ったけど、くつがどこにあるのかわかりませんでした。見つけてもさわってたしかめたけどうまくはくことができませんでした。兄にくつを手わたししてもらって、やっとはくことができました。さらに、外にはかいだんが二だんあります。たった二だんのかいだんも、そこにあるとわかっていても、とてもこわくて足がだせませんでした。部屋に戻って、今度はおかしを食べてみようと思いました。いつもおかしをしまつてある所まで行ったけれど、どれがどのおかしかわからず、自分が食べたい物とはちがうおかしを何回も手に持ってしまいさがし出すのが大変でした。あけて食べてみたけれど、いつもみたいにはおいしくありませんでした。いつも、目で見えているのがあたりまえだけれど、まっくらのままです。活するのは、とてもこわいなと思いました。人の助けがないといろいろな動きをすることがむずかしかったです。

いつも目が見えているから歯みがきをしたりテレビを見たり遊びに行くことができると改めてわかりました。目が見えないと、いつもどおりに生活することが大変なことがよくわかりました。

ぼくは、目が見えることがあたりまえだと思わないでいたいと思いました。ぼくは、目が不自由な人の生活をしてみて少しの手助けが、どんなに大切かがよくわかりました。

目の不自由な人を見かけたら、少しでも手助けできることがあるか、自分から声をかけたいと思いました。

【佳作】

ゴミから学べること

十四山中学校 二年 早川 稀々

私の住んでいる地域はきれいだと思っていました。毎年ゴミ拾いが地域であり、私はそれに今回初めて行きました。もともと、この地域はきれいだという勝手な認識があつたので、地域のゴミ拾いはなくていいのではと思っていました。

私はそんな認識もありつつ、母に連れられて行きました。ボランティアに参加した一人一人にごみぶくろと手ぶくろが配布され、ゴミ拾いがスタートします。ボランティアの参加者の中には火ばさみやスコップなど持参している人も多かったのですが、私は火ばさみもスコップも持っていなかったもので、手ぶくろで拾っていました。最初は何も考えずにゴミを拾っていました。が、拾っているうちに、「なんでこんなにもゴミがあるんだろう！」と思い始めたのです。周りを見わたしてみると、いつもの通学路なのに、そこにはまるで違

った風景がありました。本当にここは私たちの住んでいる地域なのかと思うぐらいで、そのとき私はびっくりしすぎて固まったままだったそうで、母が「どうしたの？」と言ってくれるまで口が開いていたそうです。拾っているゴミの中には、たまにゴミではなく、ぼうしやスリッパ、タオル、衣類なども落ちていて「なんで落ちるんだろう？わざと落としたのか？」など、疑問がたくさん出てきました。このゴミでない物たちも、持ち主が見つからなかったらゴミになるんだな、と思うと、物たちにはかわいそうだなと感じました。

拾ったゴミの中でも特に多かったのが、たばこの吸いがらです。ところどころに落ちていて、火がついたものもあれば、だいぶ前からあったようなものもあり、ひどいなと思いました。そのたばこの吸いがらを落としたりした人たちもボランティアに参加して、地域環境に貢献してほしいと思いました。もしかするとボランティアに参加している人たちの中にも吸いがらをついつい捨ててしまっているから参加している人もいるかもしれません。そういう人たちが多ければ多いほど、地域の環境が良くなり、温かい地域になるのでは、と思いました。

私は普通の環境も違う視点で見ると普段の風景も変わった風景になるのだなと実感しました。ボランティアから帰ってきて最初に思ったことは「とてもつかれたな」でした。

以前、花火大会の翌日に家族で掃除をしに行きました。そのときは場所が広かったけれど参加人数も多く、拾うゴミが少なくてそんなにつかれませんでした。でも今回は地域でのボランティア活動なのであまり参加する人がおらず、とてもつかれました。

私は今回の活動で物を大切に扱うことと、普段の日常生活も少し違った視点で見えてみることを学びました。ただゴミ拾いに参加しただけなのに学ぶことがあるなど、最初ではない考えでした。この実感したことを他の人にも共有したくなりました。学校でもそういう掃除から学べることを、いろいろな人に知ってほしいです。

また、ボランティアのすごさにも気づきました。ボランティアは、お金も何ももらえない。けれどなぜか参加したくなる理由。先日、二歳児が行方不明になり、ボランティアの方が見つけた、というニュースがありました。あのボランティアの方は長年ボランティアをしているそうで、東日本大震災や熊本の震災の被災地に行き、ボランティアをされていたそうです。その方は、所詮ボランティア、何かもらえるわけではなく、いから、と行かないのではなく、元気づけて安心させることでその被災した人たちが少しでも笑顔になれることが私にとつてのお金だと、良い言葉なのにさうつと言っていて、とてもかっこいい人になりました。これから私もそういうかっこいい人になりたいです。

【佳作】

勉強になった福祉体験

白鳥小学校 五年 稲垣 呼音

学校の体育館で、福祉体験がありました。初めての経験なので少しきんちようしました。初めに車いすの説明がありました。閉じ方や出し方など、その時には、指をはさまないようにすることを教えてもらいました。とても大切なことだと思います。次は、必ずブレーキをしていないといけないことです。ブレーキをかけていないと、勝手にすべり始めていくからあぶないということですよ。次は、車いすの車輪は、二つあるということですよ。タイヤにはさわらず、ハンドルをにぎることを教えてもらいました。次に、車いすの曲がり方などのそう作や車いすの持ち上げ方を教わりました。説明だけでも、思ったことがたくさんあり全て覚えられたか少し不安でした。

説明の後は、いよいよ車いすに乗る体験です。私は車いすに乗ってとてもおどろきました。それは、思っていたよりむずかしく上手くいかなかったからです。少しのだん差でも上がることはとてもむずかしく、私には出来ませんでした。曲がる動作では、障害物として置いてあるカラーコーンに、当たりそうでぎりぎり曲がるのが出来ました。車いすがこんなにもむずかしく大変なものだとは思わなく、すぐくおどろきました。

た。車いすを上手にそう作するには、たくさん練習が必要だと思います。車いすは足の不自由な人達には、必要な乗り物だと思います。これから先の未来には、安全に車いすをかん単にそう作できるよう進化してくれるとうれしいです。もしかしたら車いすとはちがった乗り物ができるのも良いかと思っています。

次は点字です。点字は、目が不自由な人達に作られたそうです。指でさわるとぼこぼこしています。それを文字として表すことが出来ます。覚えるには大変だと思います。

次は、点字の打ち方、読み方を教わりました。そして実際に打ってみました。点字板というプレートに紙をはさみ、自分の名前を打ちました。打つ時に、「カチッ、カチッ。」

と音が聞こえました。きちんと文字が打っているか心配でした。出来た点字を目が見えない方に読んでもらいました。

「いながきおとねさん。」

と言ってくれました。成功していてとてもうれしくほつとしました。

次にたくさん打たれた点字の紙が配られました。読んでみて下さいと言われましたが、一文字しか読めませんでした。点字はとても私にはむずかしいことだと良く分かりました。点字のようなむずかしい物でないような物が出来たら良いなと思います。

この二つの福祉体験をして思ったことは、二つとも訓練がいる、かん単ではないということです。この二つがあつても、みんなの助け合いもいると思います。おたがい声がかけ合えられるようににつこりと笑顔でいたいと思います。

そして車いすと点字がもつと使いやすく、便利になることを願っています。

【佳作】

福祉体験をやったこと

十四山東部小学校 五年 土方 茉結

四年生のときに私は、じゅ業の福祉体験で、Yさんという車いすを利用して生活している人に会いました。じゅ業で、実際に車いすに乗って三ツ又公園へ行ったり、車いすレースをしました。やってみたら道路がでこぼこで進むのが大変だった。まがったりするのがとてもむずかしかったです。左にまがる時は、右のタイヤだけを動かすからうでがつかれたし、しばふや坂道は進みにくいので、うでの力がすごく必要でした。Yさんは簡単そうに車いすに乗っていたけれど、本当に大変なのがよく分かりました。私は、車いすに一日

乗っただけでうでもいたくて体もくたただったけど、車いすを利用して人へは、毎日こんなに体力を使っているすごいなと思いました。車いすレースは、最初はカラーコーンをよけるのをやりました。カラーコーンをすぐにたおしてしまうので、よけるのが大変でした。次にとび箱のふみだいをのぼって坂道を体験しました。それからマットの上ののって進みました。車いすがしずむので前に進むのが大変でした。最後に、車いすに乗ったままバスケットボールをゴールに向けて投げました。立って投げるよりも力が入らないし、しんちようも低くなるのであまり高く投げられなくてぜんぜんゴールに入りませんでした。

私は、車いすを利用して生活している人は、不自由な生活でかわいそうだと思っていました。でも、そうではありませんでした。Yさんは元気で明るく、自分でできることは、何でもやろうとして人一倍努力している人でした。Yさんは車の運転もします。色々なスポーツもします。困っているときには、手助けが必要になります。何でもかんでも助けてほしいとは思っていません。だから私はもし車いすの人が「ちょっと手伝ってもらえますか。」と言われたら、すすんで手伝おうと思いました。

【佳作】

ひいおじいちゃんとひいおばあちゃん

日の出小学校 四年 長瀬 優杏

わたしには八十六才のひいおじいちゃんと八十四才のひいおばあちゃんがあります。ひいおじいちゃんは耳があまり聞こえないので、ほちよう器をつけていたり、足の力が弱くて早く歩けないので、家の中ではつえ、シルバーカー、おでかけのときは車いすやカートを使っています。心ぞうがわるくペースメーカーをつけているので身体しよう害者手帳一級をもっています。ひいおばあちゃんも、足の力が弱くておでかけのときはカートを使っています。二人とも足の力が弱くて高いイスにすわらないと立てません。そんなひいおじいちゃんとひいおばあちゃんですが、でかけるのが大好きで、いつもは少ししか歩かないけど、おでかけをする、たくさん歩きます。ひいおばあちゃんは、畑仕事をしています。春、夏は、スイカやナス、キュウリ、タマネギなどをつくっていて、秋、冬は、かきやみかん、バナナ、白菜、大根などをつくっていて足が弱くて早く動けないけど、自分にはないこんないいところがあります。

わたしは、そのひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんに大きい声で話すようにしています。家の中では、席をかわってあげて、おでかけのときは、手をつない

でいっしょに歩いたり、カートをもつていってあげたり、車いすをおしたり、荷物をもつてあげたりしています。ひいおじいちゃん達の家まで車で一時間かかりますが、おでかけを楽しみにしているひいおじいちゃん達が待っている、毎週土曜日に会いに行っています。いつも笑顔ででむかえてくれるので、わたしも会いに行くのが楽しみです。

わたしは、ろう人ほけんしせつに祭りのお手伝いに行ったことがあります。車いすに乗っている人やつえをついて歩いている人がすごくたくさんいて、びっくりしました。わたしは一人や二人しかお年よりは見たことがなかった、そこでへ行つてひいおじいちゃん達のような体の弱い人がたくさんいることが分かりました。

わたしはひいおじいちゃん達とおでかけに行くと、お母さんが車いすマークを車につけて、車いすマークの所に車を止めています。ひいおじいちゃんが身体しよう害者手帳を持っているからです。

しせつで見たように、体の弱い人がたくさんいることが分かったので、これからわたしは、お年よりが乗っていないときは、車いすマークに車を止めないようになり、だれにでも心づかいできるようにしたいです。





この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。